

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2010

課題番号：19520414

研究課題名（和文） 日英語ならびに西欧諸語における時制の比較研究

研究課題名（英文） A Comparative Study of Tenses in Japanese, English and Other West-European Languages

研究代表者

和田 尚明 (WADA NAOAKI)

筑波大学・大学院人文社会科学研究所・准教授

研究者番号：40282264

研究代表者の専門分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・英語学

キーワード：時制、比較研究、証拠性、モダリティ

1. 研究計画の概要

本研究は、次の2点を目的とする。

(1) 言語系統的にまったく異なる英語と日本語の時制現象の比較研究を包括的に行える枠組みを構築する。

(2) (1)の時制モデルを基に、日英語とドイツ語・オランダ語・フランス語・スペイン語の特定言語環境における時制現象の比較研究を行う。

本研究の基盤となる時制理論は、以下の3点を反映することを目指している。

(1) 時制の関連領域である助動詞やアスペクト、モダリティや証拠性に関する領域をも含めた動詞体系全体を射程に収めた包括的なモデルであること。

(2) 日英語の時制構造の相違を反映させることのできるモデルであること。

(3) 時制解釈のプロセスの際に、時制形式の使用者である話者の関与、すなわち、主観的要因の関与が可能なモデルであること。

この時制モデルを基にして、主観的要因が大きく関わる言語環境である、独立節（特に、未来表現）、間接話法補部、描出話法補部における各言語の様々な時制形式の解釈メカニズムを解明する。また、対応する時制形式の言語間の比較研究も行う。

2. 研究の進捗状況

(1) 本研究を行う単位として、主に、次の4つを中心に進めてきた。

①モダリティ体系や助動詞、主観性などを取り込んだ日英語比較のための時制理論の構築（担当：和田）

②日本語とフランス語などの比較を行うためのモダリティ理論の提案（担当：渡邊）

③特定言語環境における日英語とドイツ語・オランダ語の時制解釈のメカニズムの解明（担当：和田）

④特定言語環境における日英語とフランス語・スペイン語の時制解釈のメカニズムの解明（担当：渡邊・和田）

(2) この3年間で、渡邊と和田の研究会を17回開催し、意見交換ならびに討論を行った。また、渡邊と和田ならびに大学院生が参加したワークショップと、学外から専門家を招いての講演会を開催した。刊行された論文は10件、学会発表等は7件、編著書が1件である。

(3) これまでに明らかにしたことは、以下のとおりである。

①本研究の研究単位①で構築した時制理論に、時制解釈に影響を与える主観的要因の1つとして「話者意識への引き寄せ（C-牽引）」という概念を導入することで、日英語ならびにドイツ語・オランダ語・フランス語・スペイン語の間接話法補部ならびに独立節における時制現象（特に完了形）の相違に対して統一的な説明を与えうる可能性がでてきた。

②本研究の研究単位①で構築した時制理論を基に、登場人物の視点や主観的概念である「強制(Coercion)」という操作を取り込むことで、知覚動詞補部における日英語の時制形式選択ならびに時制解釈の類似性・相違性の説明にも有効であることが分かった。

③本研究の研究単位①で構築した時制理論を基に、主観的モダリティ論を積極的に取り込むことで、英語・ドイツ語・オランダ語の未来表現や英語・オランダ語の過去形にまつわる諸現象が統一的に説明できる可能性

が明らかになった。

④本研究の研究単位②で提案したモダリティ理論を用いた時制現象の分析を行うことで、フランス語ならびにロマンス諸語の単純未来、迂言的未来、半過去、などにまつわる諸現象が統一的に説明できる可能性が明らかになった。

3. 現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。

(理由)

まず、本研究の目的の1つである、日英語の時制現象の比較研究を包括的に行える時制モデルのコア部分を構築し、その一部は和田が編者の1人となって編集した『「内」と「外」の言語学』に収められた論文「「内」の視点・「外」の視点と時制現象」として結実している。次に、もう1つの目的である、上述の時制モデルに基づく日英語ならびにドイツ語・オランダ語・フランス語・スペイン語の特定言語環境における時制現象の比較については、和田論文「公的自己中心性の度合いと西欧諸語の法・時制現象の相違」や渡邊論文「フランス語およびロマンス諸語における単純未来形の総合化・文法化について」をはじめ、何本かの論文としてまとめられている。さらに、和田がベルギーで海外協力者との研究交流ならびに山口大学の研究会での発表を、渡邊がフランスや中国で開催されたセミナーならびに国内の全国学会での発表を行うことで、研究成果を定期的に発信してきている。

4. 今後の研究の推進方策

本課題最終年度の平成22年度は、以下の3点を中心に研究を行う。

(1) 和田が海外協力者の Bert Cappelle 氏と編者を務める、本研究の成果の一部を含む英文論文集 *Distinctions in English Grammar* を刊行する。

(2) 特定言語環境における時制現象の比較研究については、これまでのところ日本語とゲルマン語、日本語とロマンス語とに別れて行われる傾向にあったので、これらの橋渡しを行っていく。

(3) 特定言語環境における日英語ならびに西欧諸語の時制形式対応資料集を作成する。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計10件)

- ① Wada, Naoaki, “The Present Progressive vs. *Be Going to*: Is Doc Brown Going Back to the Future Because He is Going to Reconstruct It?” *English*

Linguistics, 26, 96-131, 2009, 査読有

- ② 和田尚明 「公的自己中心性の度合いと西欧諸語の法・時制現象の相違」『ことばのダイナミズム』277-294頁、2008、査読有

- ③ 渡邊淳也 「フランス語およびロマンス諸語における単純未来形の総合化・文法化について」『文藝言語研究(言語篇)』、15-44頁、2008、査読有

[学会発表] (計7件)

- ① 和田尚明 “On Declerck’s Distinction between Absolute and Relative Past Tenses: Homophonous or Polysemous,” 山口大学英語学研究会、2009.9.17、山口大学
- ② 渡邊淳也 「分岐的時間の表象を用いた時制・モダリティの連関の説明の試み」、日本フランス語学会第250回例会、2008.9.27、慶應義塾大学

[図書] (計1件)

- ① 坪本篤朗、早瀬尚子、和田尚明 (編)『「内」と「外」の言語学』、開拓社、2009、430頁